



## 耳納風土記⑮

## ほうれきいっき 宝暦一揆

ありまとようじ

令和3年（2021）は、久留米藩初代藩主有馬豊氏が久留米城に入城してから400年の節目の年にあたります。久留米藩の藩境を流れる筑後川は、九州一の大河として流域の発展を促しました。当時久留米藩領だった現在のうきは市域も、筑後川の治水・利水工事を経て大きく石高が増加し、商品作物の栽培は経済の発展を促しました。しかし、発展の裏には多くの苦勞や争いがあったのも事実です。今回は、そうした争いの歴史的一幕である一揆についてご紹介したいと思います。

宝暦4年（1754）2月、久留米藩7代藩主有馬頼ありまよりゆきは財政難を切りぬけるための苦肉の策として人別銀にんべつぎん（人頭税）の賦課を決定し、藩政への不満を貯めこんでいた人々を一斉蜂起へと向かわせました。これを「宝暦一揆」と呼び、数ある歴史上の一揆の中でも一揆参加者の規模は全国有数であったと言われています。それでは、一揆発生から終息までを時系列に沿って見ていきましょう。

人別銀の課税が人々に伝わると、1回目の納税日（3月25日）を前に、まず上三郡（生葉・竹野・山本）の人々が反対を表明し、やがて騒動は久留米藩全域に波及しました。竹野郡では、まず最初に松門寺印若で人々が集まり始め、やがて山辺の石垣神社に移動し、1,000人程が集結しました（3月20日）。

生葉郡では、西溝尻村の古賀勘右衛門かんえもんらがリーダー格となり、村々と連絡を取り合って大石や朝田の神社に集まり、ほら貝や太鼓などで氣勢を上げ始めました。やがて生葉郡組と竹野郡組は合流し、吉井の若宮八幡宮に集結しました（3月22日頃）。その数は2万人とも言われます。この集団は久留米城下を目指して、最初は竹野郡の八幡河原に移動しましたが、刻々と膨れ上がる一揆勢に手狭になり生葉郡の小江河原に移動しました。この頃には一揆勢は組織化され、富裕商人や庄屋から食料や薪を要求する者や、山林の木を伐って仮小屋を建てるなど、持久戦の構えを見せ始めていました。さらに、寺子屋の師匠など、知識層を中心に各大庄屋組ごとに嘆願書を作成するなど、具体的な要求をまとめ始めました。



吉井町若宮八幡宮  
生葉郡と竹野郡で集った2万人とも言われる一揆勢はこの神社に集結しました。

一方で、一揆の暗雲が久留米藩全域を包み込む中、藩の上層部は危機感を募らせ、対応に苦慮していました。各地の一揆勢に対しては、各郡奉行達を説得・鎮圧にあたらせましたが、一揆勢のあまりの勢いに効果はありませんでした。実はこの時、藩主有馬頼僮は江戸に滞在しており、藩の全権は筆頭家老の有馬石見ありまいわみに託されていました。石見を中心に久留米藩では連日連夜協議を重ねましたが解決策は出ず、小江河原の堤防上に直訴箱を置き、各郡の願書を入れさせた後に回収しました。結果、有馬石見が直々に小江河原に出向き、人別銀の取り止めを一揆勢に言い渡しました。こうして、膨大な数の一揆勢は各々帰途につき（3月28日頃）、平和的に解決したかに思われました。

しかし、江戸に滞在していた藩主頼僮は一揆の知らせに激怒し、指導者の厳罰と再発防止を厳命しました。

これを受け、藩では一揆指導者の捜査を進めました。やがて、一揆発生から月日が経った7月頃から次第に指導者や藩に非協力的だった庄屋層が捕らえられはじめ、最終的には200人以上にも上りました。その後厳しい詮議を経て、10月の終わりまでに死罪37名、追放76名、過料47名にも達しました。死刑は即日執行され、晒し首としてそれぞれの村に送られました。

一揆の結果は有馬藩政上類を見ない大量処罰という悲劇的な結末を迎えてしまいました。この一揆から60年程前、田畑を潤すために筑後川の水を引くという大事業を成し遂げた庄屋達は、今でも語り継がれる一方で、一揆で処罰された人々は当時墓を作ることすらはばかれたといえます。しかし後世、彼らを供養するために建てられた墓もあり、人々の暮らしを守るために立ち上がった人がいたことをひっそりと物語っています。



古賀勘右衛門の墓

宝暦一揆で指導的立場にあった西溝尻村の百姓、古賀勘右衛門の墓。建てられたのは、死罪後40年程経った寛政の頃と推定されます。



## 小江河原（推定地）付近

若宮八幡宮に集結した一揆勢は八幡河原に移動し、最後はこの小江河原で野営しました。そして、人別銀の取りやめもこの場所で言い渡されました。